協和うとう会
会員名簿

会員情報(50音順)	私の謡曲思うこと ザックバラン
あさい　のぼる 浅井　昇（観世流） 四日市工場グループ 1925年6月26日生 [redacted]	協和うとう会40周年記念おめでとうございます。久しぶりの六瓢能舞台での会は、良かったと思います。番組の編成など大変だろうと思います。40周年と一口にいっても大変なことです。有難うございました。現在、謡曲の稽古は月1回先生による稽古があります。その他の会には2ヵ所入会しておりますが、1ヵ所は毎週土曜日に会(別会)として3曲選んで謡う会を行なっております。
あさの　ゆりえ 浅野　由吏江（観世流） 元四日市工場グループ 1969年5月24日生 [redacted]	数年前、ほんの少しのおつき合いでしたが、以降、能や狂言などを興味をもってみることができるようになりました。あと、やっぱり音程のあるものは向いてないというのを実感できたのも収穫をいえば収穫？
あさはら　ほうへい 浅原　方平（観世流） 元大阪支社グループ 1925年5月16日生 [redacted]	今でも強く印象に残っているのは平成二年奈良薬師寺でのうとう会です。堅い寺側は「協和発酵」ならばと漸くお借り出来た由。100畳敷の堂内に文字通りの雑魚寝。払暁4時起床凍て付く中を読経に写経。心を洗い清めたあと朝食のお粥は最高の美味でした。水原一瓢先生とはその時が永久のお別れになりました。 私の近況は週3回近在の善男善女と声高らかに謡うのが生き甲斐になっています。
あまの　みちこ 天野　美智子（観世流） 在京夫人グループ 1934年3月10日生 [redacted]	謡曲で思いつくことは、他の稽古事に比べ、私にとって目上の方、年上の方に恵まれ、いつもこちらが吸収させていただける立場にあったことです。 人生の先輩方を見習っていると、いつの間にか良い中年になっていたという、ありがたい稽古事でございました。

あらい　じゅん 新井　純（観世流） 本社観世グループ 1914年12月2日生 [redacted]	（このところ、協和うとう会には欠席が続いていますが、お元気です。本誌2ページで健筆を振るっておられます……編集者注）
いいじま　しげはる 飯島　重治（観世流） 元本社観世グループ 1949年9月25日生 [redacted]	謡曲との出会いは、10年ほど前になると思うが、土浦工場で富岡先生がご指導されていることを知り入部したと思う。今思うと声がデカイだけのまったくの音痴がことこあろうに謡曲なぞに興味をそそられたのは、多分親父の一言「男の嗜み」という言葉を思い出したからだと思う。おそらく周りの人たちには大変ご迷惑をおかけしたのでは……。ごめんなさい、出来ることならもう一度京都のあの能舞台に上がってみたい。
いそべ　たけお 磯部　武夫（観世流） 大阪支社・堺工場グループ 1920年8月18日生 [redacted]	第40回うとう会で1回目からの出席者は高橋・西村・富岡氏、私の4人でした。毎回場所を変えた催しは大変な苦労ですが、今後も盛大な会を続けられるように、皆さんの努力をお願いします。 私は昭和21年、故大西信久師につき、はや55年、能を2番舞いました。今も大西智久師のお稽古を受けています。もう上達するより、悪いクセがつかないよう心掛けています。
いなとめ　ゆういち 稲留　雄一（観世流） 元堺工場グループ 1947年6月17日生 [redacted]	私の謡曲歴は堺工場で勤務していた昭和47年から50年までの3年弱のみで、やめてから30年近くになりますが、当時の練習や舞台のことは今でも楽しく思い出します。そろそろ定年後の生活を考えることになりましたので、老後の趣味としてまた再開しようかと思ったりしています。
いまい　じゅんこ 今井（谷崎）純子（観世流） 元四日市工場グループ 1969年9月9日生 [redacted]	初めてうとう会に参加した時は相棒の付き添いという形でしたが、翌年には聞かれる前に出番が決まっており、当然のように参加させられ、山家さんの強引さにあきれた事もありました。ですが、無理にでも引っ張ってくれる人がいなければ、謡曲というものに触れる機会もなかったと思うと、山家さんにも感謝です。もう退職してうとう会とも離れていまいまいしたが、いい思い出になりました。

いわせ　あつし 岩瀬　厚（観世流） 元本社観世グループ 1937年4月17日生 [redacted]	敷居が高いナー、すっかりご無沙汰ですからね。 謡といえば久しぶりでしたが、昨年甥の結婚式で大津に行ったとき、「高砂」の例の一節をやりました。全く冷や汗ものでしたが…。何しろその昔安嶋将さんからいただいたテープ頼りの一夜漬けでしたからね。帰りに三井寺へ寄ったら、24年前の当寺でのうとう会が甦りました。あの夜の雑魚寝が懐かしい。
うちだ　かずこ 内田　和子（観世流） 元防府工場グループ 1962年8月13日生 [redacted]	謡曲を始めてみないかと誘われた時、上手に謡うことは出来なくても、曲趣などの知識があれば、今まで「わからない」ことが理由であきらめていた能の鑑賞も楽しめるだろうと思いました。予想どおり上手に謡うことも上手に舞うことも出来るようにはなってはいませんが、友人と能の会に出掛ける時に、ありったけの知識で解説してあげることが、ちょっぴり幸せなこの頃です。
おおしま　まこ 大島（小畑）真子（観世流） 元四日市工場グループ 19　年　月　日生 [redacted]	物語的な表現の長い詩のような謡曲、足の微妙な動きがとても新鮮な仕舞い。日本の古いオペラのような能は私にとって全く未知の世界でした。そこへ足を踏み入れることになったのは、ご縁があったからなのでしょうか。今は日々慌しく過ごしている私にとって能という伝統文化に触れられ、とても貴重な体験をさせていただいたと感謝しております。機会があれば、ゆっくり鑑賞してみたいものです。
おおつぼ　かずや 大坪　一彌（観世流） 元富士工場グループ 1927年2月17日生 [redacted]	協和うとう会は第1回から20回まで参加、懐かしい限り、この度40回記念と聞きうたた今昔の感、と同時に続けてこられた関係者の熱意に敬意を表します。 古希をとっくに過ぎた私も2つのグループの世話を週1回欠かさず続けている現在、富士工場時代多忙にかまけて、うとう会はほとんど一夜漬けで参加していたことを慙愧している次第です。継続は力なりとか、細くとも切れないように。
おおはし　りょうさく 大橋　良作（宝生流） 富士グループ 1929年9月25日生 [redacted]	謡歴は25歳からで47年となります。若かった富岡、西村両先生が富士工場の土手で毎日大声で謡っているのを聞いていて青山先生（宝生）に習いました。 鼓は近くの蛭海先生で人間国宝並みでなんでも教えていました。驚くことは狂言にでる子猿の踊りを小さい子供に教えられ、またその子供が可愛らしく面白く踊るのです。このあたりは高橋先生がよくご存じです。毎日楽しい毎日でした。

おおもり　たいりく 大森　大陸（観世流） 本社観世グループ 1938年3月22日生 [redacted]	細々ながらも私の謡曲歴は20年を超えました。これまで続けられたのは、ひとえにグループに属していたからのことと深く感謝しています。謡曲本に書かれている符牒にはそれぞれに意味があって、これらを忠実に再現することにより、さらに深みのある豪華絢爛たる謡曲が現出するであろうことを最近になって教えられました。数百年の歴史を経ているだけあって、謡曲は実に奥が深いですね。
おかがき　よしのり 岡垣　克則（観世流） 元本社観世グループ 1941年2月2日生 [redacted]	協和うとう会40周年おめでとうございます。40年にもわたって続くことは、偉大なことだと思います。私の近況を記しますと、現在日本フィルハーモニー協会合唱団に属して、「第九」などを歌っています。毎年サントリーホールで演奏しますので、ご来駕をお待ちします。息子が数年前に観世流の家元の孫娘とご縁があり、この意味で私はまだ謡曲と縁がつながっていると思っています。
おかだ　ひであき 岡田　英明（宝生流） 富士工場グループ 1935年10月27日生 [redacted]	私の先生（故野村蘭作先生）はいつも、仕舞を教えるときには世阿弥の言う「離見の見」をおっしゃっておられましたが、能をやらない私どもには、理解の外にありました。先生からの影響があって、謡をいくらかやっても、それは「能の一部」にすぎないので、世阿弥の芸の奥行きからはほど遠いと思っています。しかし、天才世阿弥の作った日本の芸術に触れられたことは、幸運だったと思っています。
おかち　りょう 岡地　諒（観世流） 元東京研究所観世グループ 1941年12月20日生 [redacted]	幽霊会員にまでご連絡をありがとうございました。40周年とは長く続いたものですね。関係者のご努力に敬意を表します。私も若かりし頃、少しばかり参加させていただいたことを楽しく想い出しています。すでに「協和は遠くなりにけり」とはなりましたが、謡だけは生涯の友、今は地元の人達と暇をみつけて少しずつ楽しんでおります。うとう会の末永き継続とご発展を祈ります。
おかの　ひろこ 岡野（野村）博子（宝生流） 元富士工場グループ 1971年3月29日生 [redacted]	カルチャースクールの謡曲教室でお会いした方々は、皆さん60歳以上の女性。一緒に謡っていて私の方が先に息切れしたりして……。ちょっと立場なかったのですが、それだけ皆さん謡い込んでらしたのです。私も、同じくらいの年齢になった時に、そうありたいと思います。でも、今は仕事が忙しいので教室には通えないのです。退職したらまた再開して巻き返しをはかるつもりです。

おだ　ふみかず 小田　文一（宝生流） 元本社宝生グループ 1934年8月10日生 [redacted]	伝統とは受け継ぐものではなく作るものといういい方がありますが、年々立派なお世話役を得て、うとう会の歴史が塗り替えられていることを嬉しく思っております。謡いとはすっかり縁の薄くなってしまった私ですが、水原先生の熱心なご指導に引きずられながら週一度の練習会に臨んでいた頃が懐かしく思い出されます。当時の教本や扇は今も大切に保管してあります。
おばら　よしと 小原　嘉人（観世流） 元土浦工場グループ 1927年3月5日生 [redacted]	平成6年10月、地元の公民館で、「観世流謡曲入門講座」の募集があり、これに入門、以来謡曲と仕舞の稽古をつづけ現在に至っております、私達の先生は他にも教室を持っており、年2回各教室との合同発表会を行なっています。ほか、地元の文化祭（観世、宝生、喜多流合同）にも参加しております。なかなか上達しませんが続けたいと思っております。協和うとう会のご発展をお祈りします。
かとう　ようこ 加藤　弥生子（観世流） 元堺工場グループ 1942年3月7日生 [redacted]	26年前に防府で謡曲に出会いまして、主人のあちこちの転勤先でも良き師に恵まれて、時々休みながら続けて参りました。8年前に磯部先生から鼓の手ほどきも受けるようになり、昨年防府に隠居してからは、謡は磯部先生に通信教育していただき、鼓は大倉流の久田先生に教えていただくようになりました。鼓は独習も飽きませんし、会の時の緊張感と終った後の開放感が何とも気持良くずっと続けてゆきたいと思ってます。
かどばやし　すえお 門林　末男（観世流） 元堺工場グループ 1942年12月20日生 [redacted]	謡曲の入り口は先輩ご勧誘のみならず、祝いの席で謡うというあっぱれ姿勢の新参者。何もわからないままシテをやりたい心意気。とうとう「うとう会」で前シテをゲット。画策も悪気もないが「シテやったり」。続いて、早い機会に結婚式での目標達成。以後は入り口付近を行ったり来たりの不将者。だけど、今も捉えて離さない、囃子の音色、地謡の迫力。そして謡った後の、あの爽快感。
かみもり　しげる 上森　茂（観世流） 四日市工場グループ 1951年7月20日生 [redacted]	謡曲との出会いは、「面を打ってみたい」と思ったことに始まる。面打ち入門を見ながら打った小面が、17回うとう会に初参加。本人は遅れること4年多賀大社であった。また、縁あって昭和61年から藤波重和先生にご指導を受けるようになり、今日に至っている。長い周期で時間が過ぎているようで、面も2面が一応完成、途中から箱に入ったままのもの2面、謡とともに気長にやってゆこうと思う。

かわさき　すけさだ 川崎　資定（観世流） 元本社観世グループ 1915年3月16日生 [redacted]	近年体調がすぐれず、うとう会には出席出来なくなり残念なり。しかし、今でも近所の謡の先生に習いながらうなっている。今さら上手になる筈もないが1人で謡うより張合がある感じがする。蛮声を上げて謡うのがくせであるが今は大声を出せばかすれ、遂には声が出なくなる。年には勝てないと諦めるほかはない。しかし趣味の少ない私にとっては謡は生きる活力となっている。
かわもり　みきお 河盛　幹雄（宝生流） 元東京研究所宝生グループ 1952年11月25日生 [redacted]	協和うとう会40周年おめでとうございます。私がうとう会に参加させていただいたのは主として約20年前ごろの東京研究所時代で、協和を退職後は残念ながら謡曲から離れています。現在は、家業の醤油屋の仕事に振り回されて、なかなか文化的な活動ができません。しかし、我家には故水原先生から教わった宝生流の本と、家内が学生時代習っていた観世流の本が混在し、うとう会の奮囲気を伝えます。
かんだ　のぶお 神田　信夫（観世流） 本社観世グループ 1932年1月1日生 [redacted]	
きくもり　えつぞう 菊守　悦三（観世流） 元大阪支社グループ 1940年2月22日生 [redacted]	磯部先生に10年近くご教示を受けましたが不熱心なゆえ上達もせず初心者の段階で終了してしまい残念です。協和うとう会での謡は恥を書きながらの連続でしたが、今となっては良い思い出となっています。 最近身近な場所で鑑賞会があり久しぶりに謡曲と接しましたが、今後も機会があれば出かけてみたいと思っています。
きたがわ　やすゆき 北河　康之（観世流） 本社グループ 1964年12月25日生 [redacted]	昨年末、クラシック音楽に興味のある職場の富田篤尚さんとコンサートの企画を練っているところ、当時同部屋だった薮下尚夫さんに誘われたのが謡曲へのきっかけでした。当初、謡曲は音楽と同じレベルのものかと思っていましたが、その独特の存在感は実に何とも言えないものを感じます。まだまだ未熟者ですが、今後ともよろしくお願いいたします。

きたに　ふみえ 木谷　芙美枝（観世流） 四日市グループ 1930年8月15日生 [redacted]	堺時代、能楽堂で見た能に感動し、唐織の素晴らしい文様に心うたれたものでした。20年後、坂井音重先生、岩屋先生のご指導により、能「杜若」恋之舞を舞わせていただきました。松田様(元宇部工場)に打っていただいた面をつけて、感動しつつ稽古に励みました。亡くなった木谷からの最初で最後のプレゼントになりました。40年、ただ駆け登ってきた私の謡曲。これからは体の不調もあり能の形付を思い素謡を楽しみたいと思います。
くしろ　ひろのり 久代　浩徳（観世流） 元本社観世グループ 1937年5月7日生 [redacted]	
こが　ゆうじ 古賀　勇治（観世流） 元防府工場グループ 1937年1月15日生 [redacted]	私は、防府工場謡曲部のＯＢです。昭和43年7月3日に入部し、今井、森脇両先生に、師事させていただきまして、約30年間を謡曲に親しんできました。非常に恵まれた環境でしたので、永く謡い続けられたことと思います。社友会及び先生方には、大変ありがたく思い、深く感謝している次第です。なお2年前に一身上の都合により、謡曲から離れておりラジオ謡曲番組を楽しみにしている今日このごろです。
こばやし　まこと 小林　誠（観世流） 土浦工場グループ 1946年9月30日生 [redacted]	私は、謡曲部に入る4年頃前には、まだまだ早いと思っていました。入って今思えば、もう少し早く入っていれば、いろんな魅力に触れられたと思い直しました。歴史ものに出会ったり、声を出すだけでなく、山田先生に会って、息をすって、腹から声を出してといつも言われて、腹式呼吸法でやっています。声を出して、呼吸法でだんだん満足感が得られるようになりました。
こまつ　さちお 小松　祥男（観世流） 元本社観世グループ 1949年1月28日生 [redacted]	うとう会には出席させていただいたことがありますが、難しさ・奥の深さがわからないうちに仕事の多忙のため参加しなくなってしまいました。 歴史と伝統のある本会のますますの発展をお祈りいたします。

こんどう　あきら 近藤　明（宝生流） 富士工場グループ 1934年4月22日生 [redacted]	謡曲は昭和45年に高橋先生について勉強を始めました。初めの5年くらいの間は、謡のトリコになってしまいました。会社を辞めて専門家としての道を選ぼうかと考えた時もありました。太鼓を蛭海先生について習い始めました。金春惣右衛門師にアクセスをしました。蛭海先生に対する不信感も生まれて来ました。この不信感が家元制度を支えているのではないか、と最近思うようになりました。伝統とは難しい。
さとう　こうじ 佐藤　恒治（観世流） 四日市グループ 1933年10月27日生 [redacted]	謡曲との出会いは、四日市工場時代富岡啓太郎さんに「謡曲を勧められたのがご縁」で皆様とお付き合いを頂戴しております。謡曲は私の生涯の友として心の安らぎ、生活の潤いとなっています。四日市を離れてはや15年になりますが、謡曲の基礎を教えていただいたお陰で大阪、名張と新しい土地でも謡曲愛好者の仲間に入れていただき楽しんでおります。
さめじま　ひろとし 鮫島　廣年（宝生流） 元東研宝生グループ 1925年12月17日生 [redacted]	私の謡曲とのご縁は昭和35年ころから十数年にわたる故水原一瓢先生の熱心な宝生流のご指導による。他の一つの宝生の流れは高橋さん指導の富士工場のグループであった。私はそれほど熱心な生徒ではなかったが、うとう会の大会出席の記憶は十数会あるから、大会出席だけは熱心だったようである。今ごろになって、もっと熱心に練習しておればと悔やまれることがある。
さわの　ただお 澤野　忠男（観世流） 元防府工場グループ 1941年4月22日生 [redacted]	冬眠に入ってから10年を経た。 途中、何度も心ある方から目覚めの催促があったものの、安易を振り捨てる冒険心がなかった結果、いまだ夢の中。
さわもと　かずまさ 沢本　和容（観世流） 元本社観世グループ 1945年8月2日生 [redacted]	みなさまお元気でしょうか。私も元気でやっています。謡曲では、不真面目な生徒で、いつの間にか遠ざかってしまい、みなさまにご迷惑をおかけしたことと思います。 今後とも、みなさまのご活躍をお祈り申しあげます。

しげむら　せつこ 重村　節子（観世流） 元防府工場グループ 1944年4月29日生 [redacted]	振り返って見れば謡曲を始めて16年にもなる。年数だけは随分になるけれど一向にうまくなっていない。やれどもやれども難しさを感じるばかりで面白さを全く見い出せなかった。細々けい古しながら諦めようと思うこと度々であった。ある時、謡曲部が休部寸前の時があった。謡曲への情熱を起こさせたのはその時のことです。今年の4月から街の先生に指導をお願いして8カ月になり、稽古に追いまくられる毎日です。やっと謡曲の醍醐味を味わえるようになったこの頃です。
すずき　まさなお 鈴木　正直（観世流） 元本社観世グループ 1912年6月17日生 [redacted]	初めて協和うとう会に伺ったのは熱海在の温泉旅館でした。恐る恐る行ったのですが親切にしてくだされ、また内容が充実したものであり、びっくりしました。以前三島から浜名湖のあたり奈良、神戸、琵琶湖まで出席させていただき楽しい思い出が一杯です（懇親会の酒が一番良かったといったら叱られるかも…）。最近数年間、脚の具合が悪く欠席、残念です。皆様のご健勝ご精進を祈ります。
すずき　まさみ 鈴木　正美（宝生流） 元富士工場グループ 1932年1月1日生 [redacted]	なんとなく始めた謡曲。それでも50曲を超える曲を練習した。しかしいまだ上達の様子なし。なかなか曲趣を理解し得ないのも一因。今まで数多くの曲を耳にしたが今でも心に残る曲がある。西村淳さんが病に癒え久びさのうとう会で謡われた「熊野」である。母を思う熊野の淋しい哀愁が心にしみた。人の心に感動を与えられるよう謡いたいものだ。
せじま　つねお 瀬島　常雄（観世流） 大阪支社グループ 1937年5月30日生 [redacted]	協和うとう会40周年おめでとうございます。防府工場で習い始め、やっと声が出るようになっ頃九州支社へ転勤となり、約10年間謡とまったく縁が切れてしまいました。その後大阪～本社～大阪～防府～大阪と転勤しましたが、その間良き先生と巡り合って継続することができました。今は謡の緩急などのとり方や、曲味や位を理解して謡うことの大切さを磯部先生から厳しくご指導いただいています。まさに「継続は力なり」ですね。うとう会のますますの発展を祈ります。
たかはし　よしお 高橋　孝夫（宝生流） 富士工場グループ 1921年8月30日生 [redacted]	よくぞ続いた40年。思い起こせば感無量です。部外の方から社内で囃子が出来るなんて素晴らしい！といわれます。 しかしむずかしいのは謡です。地頭の謡に合わせる聞く耳を持った謡。強弱。緩急。状景の描写。そしてリズム。素謡でも大ノリ・中ノリはリズムを外さないで謡いましょう。稽古を重ねることにより薄皮を剥ぐようにわかってきます。楽しく稽古を重ねましょう。

たかやま　けんいちろう 高山　健一郎（宝生流） 富士工場グループ 1933年8月5日生 [redacted]	水原さんに手ほどきを受けてから37年経ちました。協和退職後13年、前半は平尾さん、後半は高橋さんに送っていただいたテープで独習して、中謡回や交謡会、まれに「うとう会」に参加させてもらっています。現役中にはこんな長く続くとは思いもかけませんでした。1年に1、2度のことですが、楽しみの一つです。諸先輩の皆様方、いつまでもお達者で！
たけすえ　やすお 武居　泰生（観世流） 元大阪支社グループ 1951年2月26日生 [redacted]	20歳の頃、少しお謡のお稽古をしたことがありましたが、大阪支社に転勤して謡曲部に入り、磯部先生のもと25年ぶりにお稽古を始めました。初心者同然でした。当時の謡曲部の方々は、長年お稽古を積まれたプロにも見え、最初の頃は気おくればかりしていましたが、磯部先生の熱心なご指導のもと、ほんの少しだけ皆さんについて行けそうになった頃、下関の会社に出向になりました。下関に来て6年になりますが、磯部先生から吹きこんでいただいたテープを聞きながらお稽古をしています。
たけばやし　みのる 竹林　実（観世流） 元防府工場グループ 1935年2月11日生 [redacted]	防府工場謡曲部に入部して初めてうとう会に参加したのが三井寺の時でした。参加して感じたことは謡曲を心から謡うという心意気でした。また懇親会では社是にもありますように、和衷協同・活発発地・尽分立用各グループの方々と和気あいあいと楽しい会話が出来ることです。今後は協和うとう会の発展とお世話くださる皆々様の健康を心からお祈り申し上げます。
たじみ　やすひろ 但見　靖啓（観世流） 本社観世グループ 1942年5月21日生 [redacted]	初心不忘。始めるキッカケを大切にする性分である。例えば禁煙。20年吸った後、スパッと止めた。なぜ?とよく聞かれる。単調な生活にプレッシャーをかけようと思った。これが20年続いている。 謡を始めたのも同じようなものだ。そのためか、生活がストレス過多になると「稽古休め」の内なる声が聞こえる。さらなるストレスは無理とのことであり、迷わず従う。素直な生徒である。
たなべ　ひろあき 田辺　博章（観世流） 本社観世流グループ 1950年6月1日生 [redacted]	四日市時代に社員クラブの2階で熊沢先生から鶴亀を教えていただきましてから、もう長い謡歴になりました。謡の意味はたいして考えないで、節を追いかけてばかりであったように思います。それはそれでよかったのでしょう。人生の辛酸を体験して謡の文句に胸がつまることが多くなりました。人間憂いの花盛りとは、よくぞと言ったものです。謡に思い知らされる昨今です。

たむら　なおくに 田村　直邦（観世流） 大阪支社グループ 1947年4月26日生 [redacted]	平成元年大阪に転勤した時、某課長の「謡曲してみない。楽しいよ」という甘い言葉？に誘われて以来早いものでもう14年。しかし、生来の怠け者。いつも練習不足。本社時代の小野先生や大阪の磯部先生をさぞかしイライラさせているのではと反省しきり。しかし最近ふと気がつくとNHKの「能楽鑑賞」を見ている自分に驚いています。月並な言葉ですが「細く長く」……続きますかどうか。
つかたに　のりこ 塚谷　則子（宝生流） 富士工場グループ 1924年6月22日生 [redacted]	50年前をふり返っております。小山さん、高橋さん、私の3人は高橋さんのお宅で謡をお習いすることになりました。方向寺でのうとう会は本当に忘れることが出来ません。あれから20年余のブランクでご無沙汰いたしておりましたが、また最近図々しくお習いすることになりました。河盛さん、平尾さん本当にお懐かしうございます。くれぐれも皆様お身体にお気をつけになって、うとう会の何時までも続きますよう頑張ってください。
つざき　のぶこ 津崎　展子（観世流） 四日市工場グループ 1969年6月9日生 [redacted]	うとう会40周年おめでとうございます。私が初めて参加させていただいたのが8年前。入社して間もないころに父が謡をやっていたという理由で山家さんに誘われ今に至ります。いつもぶっつけ本番で恥ずかしい限りですが、それでも終わった後は気分すっきり。ここが謡曲の魅力の一つでしょうか。そんな機会を与えてくれた協和うとう会の今後のますますのご発展を心からお祈りいたします。
つなの　まさみ 綱野　政美（観世流） 堺工場グループ 1949年8月3日生 [redacted]	謡曲との出会い——20歳代の頃、誘われるままに謡曲部の稽古を見に行ったことがあったが、全く興味が湧かなかった。そのまま縁がなかったが、40歳を過ぎた頃に誘われた時には、若い頃には感じなかった興味を覚え、50歳を過ぎた今日まで続いている。年齢を重ねるほどに謡曲の深みを味わうことが出来るようになるのかと感じているこの頃である。
てしま　まさこ 手島　正子（観世流） 在京夫人グループ 1939年1月2日生 [redacted]	お謡は防府の社宅で服部幸さんに教えいただきましたのが最初でした。関根先生が防府までおいでくださり、皆様と一緒にご指導いただきましたことを懐かしく想い出します。その後あちこち転勤いたしましたので、以後お稽古をしていませんがテレビ、ラジオ等で鑑賞しています。この会のお陰で旧交を暖めたり、皆様のお謡を聴かせていただくのが楽しみです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

土居（どい）　鋭一（えいいち）（観世流） 元大阪グループ 1954年8月2日生 [redacted]	ニーハオ！私は、現在香港で仕事をしております。私がうとう会に入ったのは、平成２年の大阪支社食品部時代でした。当時課長の西野さんから、タダ酒飲ましてやるから来ないかとの忘年会の誘いが、貴重なきっかけとなりました。東京支社へ転勤になる約６年間、日本の伝統文化である謡曲という世界に触れられたことを、今では懐かしくまた嬉しく思えます。営業職を理由に練習はサボってばかりで、磯部先生には面目ありません。録音していただいたテープを聞いて、何度か発表会を無事にこなすことができました。もっとしっかり勉強していたら中国、香港で披露できたのにと思うと残念です。帰国したら再開します。
富岡（とみおか）　啓太郎（けいたろう）（観世流） 本社観世グループ 1926年6月27日生 [redacted]	四日市工場建設時に一時中断したが、第一回から参加している。任地の関係から多くの先生方に教えを受けたが、現在謡を野村四郎先生、笛は一噌仙幸師についている。所属クラブは、松諷会、観扇会、一翁会、観生会、蔵前観世会、同台謡曲同好会と続き、最後の締め括りは“うとう会”である。 いつもながら趣味を同じくする者同士との歓談を楽しませてもらっている。
富田（とみた）　篤尚（あつひさ）（観世流） 本社グループ 1965年2月24日生 [redacted]	皆様と同じく諸先輩方に誘われなんとなく入部してしまいました。本社医薬開発本部におります。現在英会話教室のため練習はお休みしておりますが、今後も続けたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。
中村（なかむら）　佶郎（きちろう）（宝生流） 富士工場グループ 1935年1月1日生 [redacted]	この頃昔の学生時代の仲間が６人ほどで謡曲を唸っている。また先生から、今のうちでないと出来なくなるからと勧められ、仕舞も始めた。つくづく感じるのは、年柄暗記力の衰えだ。本番の舞台の上で語句に詰まり、後ろの席からの援声でやっと進行する。よくある情景で「ああ、みんなそうなんだ」と変に安心する。それだけに謡曲を覚えるのはボケ防止になり、腹式発声とともに健康に良い。 我流の下手なグループ゜の謡だが、矢来能楽堂の吟松会、軽井沢舞台の長野会、国立能楽堂の全国学生ＯＢ謡曲会等、登場機会は多い。特に今秋私にとって画期的なのは、滋賀大津での協和うとう会に参加させていただくことだ。集う人も多士済々、レベルの高い会なので及ばずながら懸命に努め、懇親も深めたいと思う。

ながやま　まさこ 永　山（高野）正子（宝生流） 元東京研究所グループ 1958年12月18日生 [redacted]	うとう会40年、おめでとうございます。謡をやってよかったなあと思うことは、どこでもよく通る大きい声が出せることです。それから一度出会いがあると、30年50年のお付き合いは当たり前ですから、仲良く、和を持つことの大切さを教わりました。その中から心にしみていく言葉を宝物のように持てることは、謡本に使われているセリフの言いまわしに魅力があるからでしょうか。
にしむら　あつし 西　村　淳（観世流） 本社観世グループ 1928年4月20日生 [redacted]	別紙に２～３千字ほどの文章を書きましたが、その他に地域の月例会の旭謡会、老人（生涯）大学校のクラブ老大観謡会、学士会の同窓会の村雨会、経済界のハイレベル技量の人の集まりで発足した一旒（いちりゅう）会等にもメンバーとして加わっていましたが忙し過ぎるので一、二を残してやめました。どこの会でも拍子を知っているのは少数派でした。みなさんには先ず笛一能管から！をおすすめします。
にしむら　みちこ 西　村　道子（観世流） 在京夫人グループ 19　年　月　日生 [redacted]	主人について各地を転勤致しましたが、謡の盛んな防府では社宅の奥様方とともにクラブでお稽古したことが懐かしく思い出されます。 父は関西の方で観世を、義父は出雲の方で喜多流を謡っておりましたので、今でも謡会では両方の父が思い起こされます。 うとう会では各地に参ることが出来てありがたく思っております。次第に老境に入りますが、出来る限り続けて参りますのでよろしく！
にしもと　のりゆき 西　本　徳　之（観世流） 宇部工場グループ 1963年2月16日生 [redacted]	最近謡曲を楽しむ人も少なくなり、その存在さえも知らない人が多くなった。 そんな時の無形遺産への指定は、世界からの日本人に対するある種の警告ではなかろうか。
のむら　ただあき 野村　忠亮　（観世流） 本社観世グループ 1944年3月16日生 [redacted]	本社観世にも久々に新人２名が入部し「鶴亀」の稽古を後ろで聞いている。節回しとか緩急とか今まで念頭におかずに謡っていた点を先生が注意され“はっと”することがある。自分も最初に教えられているはずなのに、その時には気づかずに過ごしてしまったに違いない。「稽古とは一より習い十を知り、十よりかえるもとのその一」という利休道歌がある。図らずも新人の稽古がこの歌を思い起こさせてくれた。高齢化する謡曲人口。やはり新人を迎えて活性化されるのはうれしいことである。

はなだ　ゆきこ 花田　有紀子（観世流） 宇部工場グループ 1934年12月1日生 [redacted]	平成13年、協和うとう会40周年記念大会開催されましたこと、心よりお喜び申し上げます。30周年記念大会を防府で開催されたことがつい最近のように思い出されます。私にとってこの10年間を振り返っても、何一つとして得たものがありません。何事も稽古不足につきると思いながらも、謡曲の奥深い味わいを求めて稽古に頑張っております。声が出る限り謡曲を友としてゆくつもりです。皆様のご活躍とご健康を念じています。
はまだ　しんいちろう 浜田　紳一郎（観世流） 元防府工場グループ 1947年11月1日生 [redacted]	謡曲を始めて来年で10年、この世界ではひよっ子です。現役を離れた先輩方には実感がないと思いますが、今の会社の仕事はアメリカ流完全自己責任を要求されます。毎日何かを変革していかないと許されないという圧力の中で、昼休みの謡の自主練習が、心のバランスを保つのに大いに役立っています。これからも謡20年を目指して、練習を続けていこうと思っています。(長宗一雄門下<関根祥六一門>)
ひらお　まなぶ 平尾　學（宝生流） 富士工場グループ 1929年1月4日生 [redacted]	謡曲を始めたのは遅く41歳富士工場へ転勤した時で高橋孝夫師に習いました。御殿場・三島・沼津と対外活動も多く謡囃子共熱心に練習しました。平成5年故水原一瓢師のお世話で教授嘱託を習いました。そのお陰でリタイアした今も趣味として楽しむことができ感謝しています。現在謡は広島克栄先生、笛は左鴻雅義先生にご指導願っています。能・囃子の鑑賞と謡。囃子の発表会にも参加しています。
ふじい　たけお 藤井　武夫（観世流） 堺工場グループ 1940年2月13日生 [redacted]	本社で磯部先生に教えを受けて30年が過ぎました。途中空白の時期もありましたが、なかなか上達しません。定年を期に堺工場「うりの荘」で再度磯部先生のご指導を受けています。「継続は力なり」を信じ続けてゆきたいと思っています。
ふじさわ　さとこ 藤沢　佐都子（観世流） 大阪支社グループ 1926年5月17日生 [redacted]	うとう会40周年おめでとうございます。第1回から40年間ご指導してくださいました先生の方々に心からお礼を申し上げます。各地で開かれますうとう会はとても楽しい思い出です。会のあと仙台、福島に行き観光バスで楽しみました。次の時は佐渡に行きました。私は右ひざが痛くなり正座ができなくてお休みして申し訳ございません。うとう会のご盛会は社内報で読んでおります。

ふじた　ぜんじろう 藤田　善次郎（観世流） 元門司工場グループ 1926年10月14日生 [redacted]	私は生れ里には、暮になると小学校高学年生を集めて古老達がお謡い三番を教え込む風習があった。明けて正月七日夜には前の年に花嫁さんの来たうちに行き、お祝にそのお謡を披露して餅やらお金を戴いて帰り、ぜんざいを食べたりお金を分配して楽んだ思い出がある。これが謡曲とのつながり。それ以降は就職した相知工場、門司工場の同好会で梅若流、観世流を学び末席を汚して今日に至っております。
ふじた　りょうすけ 藤田　良輔（観世流） 本社グループ 1933年5月8日生 [redacted]	謡仲間での酒席では宴たけなわとなれば、みんなで「よも盡きじ……」を謡い大いに盛り上がるものです。ところがクラス会で「君は謡曲をやっているそうだが、聞かせてくれないか」と言われ、小謡の一つもやってみると座は白けるばかりです。 そこで、母校の寮歌に自分なりに節をつけみんなに謡わせると、これが案外受け謡曲に興味をもってくれます。
みいけ　きみえ 三池　公恵（観世流） 富士工場グループ 1948年9月27日生 [redacted]	謡曲を始めて、三十数年が経ち、うとう会で皆様にお会い出来ることを楽しみに、月二回の練習に、まじめに参加しています。謡をしていたおかげで、三島大社で行われた木犀の会では、東儀さんにお会い出来たり、うとう会の宿泊先では、写経や勤行を経験出来たりと、いい思い出が増えました。これからも、細く長く陶芸と両立しながら、謡と鼓を楽しんで行けたら幸せと思っています。
みずたき　しょういち 水滝　彰一（観世流） 堺工場グループ 1951年9月22日生 [redacted]	能は、よく「幽玄」という言葉で表されるが、広辞苑では「優雅で柔和典麗な美しさ。美女・美少年などに自然に備わっている幽玄も、卑賤な人物や鬼などを演じてさえ備わる高い幽玄もある」とある。美少年は遥か昔、むしろ後者に属する身にとっては、優雅・典麗な鬼を究極の目標としたいと考えている。そのためには、文字通り、鬼のような猛稽古が必要ではあるのだが……
みどり　しずお 緑　静男（観世流） 元四日市工場グループ 1944年7月15日生 [redacted]	長らく謡曲から遠ざかっていますが、この原稿を書くのに平成4年発行の「協和うとう会30周年記念誌」を見せてもらっています。それによると自分の名が番組から消えているのは昭和61年以降となっています。もう17年ほど前のことになります。当時は事故や病気で大変な頃だったのですが今となれば懐しく思い出されます。それで謡曲を再開させていただこうかなと思っています。

むらかみ　しずお 村上　静男（宝生流） 堺工場グループ 1946年8月6日生 [redacted]	昨年の秋から堺工場謡曲部の皆様にお世話になっています。宇部から堺に来て一年になりますが週一度うりの荘での練習にご一緒させていただいております。最近習い始めた笛（一噌流）でいつの日かうとう会で恥を忍びたいと思っています。堺謡曲部の磯部先生から熱心で親切なご指導をいただき大変感謝し、また有難く思っています。先生の恩返しのためにも休日は大和川の岸壁でピーピー雑音を発しています。
もりやま　きよたか 森山　清孝（観世流） 元本社観世グループ 1925年4月16日生 [redacted]	私の属する会の十周年記念で「船弁慶」のシテを務めて以来体調をこわし、約5年前から謡にはすっかりご無沙汰しています。 昨年、舞子ビラでの同窓会の折、須摩寺を訪ね、源平の往時を偲び、感慨にふけりました。 ご無沙汰しているものの謡にはまだ未練たっぷり。時折謡本を開き極度に自己流にならない程度に声を出しています。
やお　かずひろ 八尾和廣（観世流） 本社観世グループ 1947年8月1日生 [redacted]	昭和53年から謡を始め、うとう会へは21回から参加しています。うとう会での楽しみは、遠方から集まった人たちとの交流（飲み会）です。また、本社謡曲部の月2回の稽古後の反省会と称する飲み会を楽しみに参加（時々休みますが）しています。最近、ヒザ関節が痛み正座ができずに苦労していますが、「継続は力なり」とのことで、飲める限り謡曲と付き合っていこうと思っています。
やお　こうぞう 矢尾　幸三（宝生流） 富士工場グループ 1965年2月19日生 [redacted]	謡本の文字を追っかけるので精一杯でしたが、最近やっとその内容に触れることができるようになりました。インターネットにも能楽に関するページがいくつかあり、演目の発祥の地や解説が簡単に調査できます。600年前の日本文化が、ネットワークにのって世界に配信される時代です。日本の古典を読むのも楽しみになります。いつかゆっくりと謡曲の舞台となった名所を旅してみたいです。
やぎ　こういちろう 矢木　宏一郎（観世流） 元堺工場グループ 1956年1月22日生 [redacted]	最初の配属先堺工場で、当時の平尾工場長に勧められたのが謡を始めたきっかけでした。謡曲部の先生宅に毎週お伺いし、ご指導を受ける前に、ちょこっと出していただく小さめの「おにぎりとお漬物」の味が今も忘れられません。その後転勤していくうちに、いつしか遠ざかり、謡本だけが寂しげに本棚の一角を飾っています。でも、あの腹の底から朗々と声を出す爽快感は格別です。いつの日かまた……。

やすじま　すすむ 安嶋　将（観世流） 本社観世グループ 1938年1月29日生 [redacted]	謡曲に関しては謡うだけの稽古しかしていないが、体で覚えるまで謡い込んでおきたいと思いつつもこれができない。会社を卒業したらできそうにも考えていたが同じ状態が続く。うとう会を創設以来引っ張ってこられた先輩方のように、自分で仕舞・囃子にも挑戦することはとてもできないが、会として継承者が続いてくれると考えている。長年務めたうとう会事務局の経験をもとに、会としての質的レベルを継承する舞台づくりに、何か新しい役割を果たしていきたいと思う。
やすちか　つよし 安近　毅（宝生流） 元本社宝生グループ 1936年12月22日生 [redacted]	私は昭和40年代本社勤務の頃、水原一瓢さんのお宅に参上し謡の初歩の手習いをさせていただいたことがありますが、それも今は昔のこととなりました。それ以来ご無沙汰しておりますが、数年前に琵琶湖畔で協和うとう会が催された時、その近くに在住しております関係から拝聴させていただきました。その際大変懐かしい皆様にお会いして楽しいひとときを過ごさせていただきました。思い出のひとこまです。
やぶした　ひさお 薮下　尚夫（観世流） 本社観世グループ 1942年2月15日生 [redacted]	大阪の関係会社に出向した時に、支社に顔を出す口実にするため、お稽古に出させていただいたのが謡を始めたきっかけです。その年の多賀大社でのうとう会に参加しました。本社に転勤後も縁あって続けることができ、20年になります。へたなりに大声を出すように努めてきましたが、これからは美しい詞章を生かせるような優雅な謡を目指したいと思っています。
やまが　たきお 山家　多喜男（観世流） 四日市工場グループ 1939年3月10日生 [redacted]	早いもので、謡曲を習い始めて30年が経ちました。この間に、観世流藤波師や喜清流福井師の指導を受け、日常生活の中に、謡と小鼓が欠かせないものとなっております。しかし、能楽という日本固有の文化遺産について、どれほど理解しているいえば、お恥ずかしい限りです。これからは謡曲本をじっくり読んで、その文化的、社会的背景について勉強していきたいと思っています。
やまぐち　せいじ 山口　整次（観世流） 元堺工場グループ 1935年3月17日生 [redacted]	退職後、謡曲から遠ざかってしまったが、思い出に残るのは、平成2年の奈良薬師寺でのうとう会である。お堂にて日ごろの成果を奉納、翌朝のお勤め、そして伽藍再興のための写経をさせていただき、心洗われる二日間であった。これも、故加藤辨三郎翁と故高田好胤管主とのご親交によるものであり、また、細部の折衝やお世話していただいた本社・大阪支社ほかのみなさまのお陰と、ありがたく思っています。

やまだ　よしゆき 山田　義之（観世流） 堺工場グループ 1944年12月19日生 [redacted]	「うとう会」の参加者が減り寂しくなってきている。その理由に現役が少なくなり、ＯＢの方は地域活動に変りつつあるような気がする。堺工場の謡曲部も、磯部先生のご指導を賜わり約10年になる。新人の入部がなく、また、かつての部員の復帰もままならない状態が続いている。囃子謡を教えてもらうようになってから、楽しさを増したと感じている。現役を去った時には一人でも楽しめるように、しっかりと習っておきたいと考えている。
やまの　じゅんぞう 山野　順三（観世流） 四日市工場グループ 1962年9月25日生 [redacted]	うとう会には、この10年間で知立での第31回を除き、毎回参加させていただいております。始めてから十数年になりますが、いつも付け焼き刃な練習ばかりの未熟者です。今後ともよろしくお願いします。
わたなべ　かおる 渡辺　薫（観世流） 元本社観世グループ 1925年12月15日生 [redacted]	私は今迄に10冊程度の練習で謡仲間と言えませんが、聞くのは大好きです。 テレビでは能狂言は、やりますが「謡」だけはないのでテレビでもラジオでも良いですからどこか番組を教えてください。仙台は転勤して民謡をかなり勉強しましたが「謡」ほどしっくりいきません。謡の良き独学法を教えてください。協和うとう会の益々のご発展を祈っております。目下闘病中にて他地への参加は無理と思います。
わたなべ　ひさこ 渡辺　尚子（観世流） 本社観世グループ 1944年8月3日生 [redacted]	昔も今もあまり熱心な生徒ではないが、旅で謡曲の史跡に出合ったりするとまた一味違った感慨を覚える。謡曲は確かに世界を広げてくれた。一人でも大勢でも楽しめる趣味である。

協和うどう会 会員名簿（続き）

氏名	グループ
秋山　安	元本社観世
浅井　勝	元富士工場
浅野　明子	在京夫人
有馬　敏雄	元宇部工場
有本　勝	元防府工場
飯島　仁司	元四日市工場
幾田登美子	元宇部工場
池田　進	元防府工場
池田　勝	元本社観世
池田真知子	元土浦工場
石塚　謙二	元大阪支社
板村　政雄	元防府工場
伊藤　りか	元防府工場
今井　孝一	元防府工場
植松　武	元門司工場
海野　尚幸	元本社観世
江頭　博	元門司工場
大内　弘造	元東京研究所
大枝　正三	元土浦工場
大草　進	元本社宝生
大倉　博	元大阪支社
大坪　栄子	元富士工場
岡藤　弘	元堺工場
落合　恵子	元東京研究所
面谷　澄子	在京夫人
面谷　祐二	在京夫人
加来　佐吉	元防府工場
鍜治　義延	本社宝生
粕川　元一	元東京研究所
勝又　菊枝	元富士工場
加藤　包子	在京夫人
加藤　七弥	元宇部工場
加藤　博通	元本社観世
金田タカ枝	元富士工場
上條　佑蔵	元本社観世
唐本佳代子	元防府工場
川合　正允	元土浦工場
川村　實	元本社観世
河本　太	元本社観世
河盛　迪子	在京夫人
岸田　軍二	元宇部工場
木野　邦器	元防府工場
木野咲百合	元防府工場
木下登志子	元富士工場
木村　一雄	元四日市工場
久保　伸篤	元土浦工場
小池　方子	在京夫人
紅野　昭	元本社観世
古賀源太郎	元本社観世
木暮　正祐	元土浦工場
小林　好美	元東京研究所
小山しづり	元東京研究所
小山　武彦	元防府工場
斎藤　弘之	元大阪支社
坂井満里子	元土浦工場
作村　武夫	元四日市工場
佐々木二郎	元土浦工場
貞永　納	元宇部工場
佐藤　武平	元本社観世
佐藤　誠	元大阪支社
佐藤　護	元堺工場
重田　恵子	在京夫人
重信　浩一	元本社観世
島田　活志	元門司工場
島田　順一	元富士工場
島森登美代	元富士工場
志村　元	元本社
菅谷　亨	元堺工場
菅　善人	元本社観世
杉山　喜好	元防府工場
鈴木　廣	元土浦工場
須藤　恵紀	元土浦工場
高井　春樹	元東京研究所
高田　功三	元大阪支社
高橋　栄一	元四日市工場
高橋　純子	元富士工場
高山美津江	元防府工場
滝下　晴次	元門司工場
巽　俊一	元土浦工場
立林　鉄也	元富士工場
田中　均	元大阪支社
田辺　靖夫	元宇部工場
辻村　秀員	元堺工場
鶴来　伸一	元本社観世
寺西　正行	元本社宝生
堂尾　秀友	元防府工場
永井三重子	元富士工場
中川　慶次	元宇部工場
長倉　久子	元富士工場
中里　宜資	富士工場
永富　正人	元宇部工場
中原　博明	元防府工場
中村　和子	元四日市工場

中村寛之助　元本社宝生
中村　真一　元堺工場
奈良　高　元本社宝生
仁木　卓　元大阪支社
西野　邦明　本社観世
西屋寿美子　在京夫人
野口　栄男　元堺工場
野口　貞夫　元本社
埜口　登　元土浦工場
野坂　恵子　元大阪支社
丸山　和美　元富士工場
野村真由美　元宇部工場
服部　浩三　元本社観世
服部　幸　在京夫人
馬場　治次　元富士工場
浜口　元香　元東京研究所
浜野賢太郎　元本社観世
林　峰之　元土浦工場
原田　博彰　元防府工場
昼田　了　元宇部工場
弘中　吉雄　元門司工場
福井　清史　元堺工場
藤井美代子　元防府工場
藤井　祥孝　元防府工場

藤代　欣也　元東京研究所
藤原みよ子　元富士工場
古川　忠康　元東京研究所
古谷　正勝　宇部工場
保利　静人　元堺工場
毎田　治美　元社員夫人
町田　玲子　元東京研究所
松井　信行　本社観世
松岡佐代子　元防府工場
松尾　英毅　土浦工場
松崎　勝正　元防府工場
松崎　充　元宇部工場
松重　見司　元本社
松田　重久　元宇部工場
松村　茂　元本社観世
松本　正　元東京研究所
真鍋　忠彦　元宇部工場
高田　曜子　富士工場
水野　學　元四日市工場
水原　圭子　在京夫人
三谷　哲雄　元宇部工場
南　亜夫　元大阪支社
峰浦　和幸　元本社宝生
三宅　隆夫　元本社観世

村田　義文　元防府工場
望月　美江　元富士工場
百瀬　三雄　元土浦工場
森田　英基　本社宝生
森　英郎　元東京研究所
守弘　薫子　在京夫人
森本　真　元本社宝生
森山　圭雄　元宇部工場
森脇　亮　元防府工場
柳　實　元防府工場
柳　俶子　元防府工場
山縣　頌子　元本社宝生
山元　一弘　元東京研究所
吉家　重夫　元堺工場
吉岡　征一　元宇部工場
吉田　綾子　元本社観世
吉田　紀子　元本社観世
吉村　信次　元門司工場
若月　静人　元防府工場
渡辺　薫　元東京研究所
渡辺　大介　元東京研究所
渡辺　富和　元宇部工場
渡辺　昇　元土浦工場

物故会員

今田　義信　元防府工場
小川　幸男　元大阪支社
木谷　正敦　元四日市工場
笹井　義晴　元土浦工場
銭谷　秀夫　元宇部工場
多賀谷和夫　元防府工場
永岡　重信　元宇部工場
中川　年男　元本社観世
中島　義照　元本社観世
馬場　国男　元土浦工場
場本　毅　元本社観世
水原　一瓢　元本社宝生
本山　清泉　元大阪支社
森　泰城　元本社宝生
八倉巻忠二　元東京支社

編集を終えて

▼：協和うとう会四十年の記録として、「会場用の備品」についても触れておきたい。

この会は組立式「鏡板」を二つ持っている。その一つは第15回(昭和五十一年・三重湯の山希望荘)から登場した。すべて四日市工場有志の手作りである。以来、近畿・中部での会にはほとんど四日市から自家用車で運んでいる。年一回の使用とはいえ、組立部に傷みを生じている。もう一つの「鏡」は二十周年記念大会をを協和発酵発祥の地・清風クラブで開いた時、布地に油絵で観世能楽堂の鏡の松を手本に描いた。本社の絵画部の画伯たちにお願いした。生地は旗屋さんが紫白の紐で吊るすように作ってくれた。これは手提げ袋で持ち運びができ、第23回の熱海でも使われた。

▼：二つ目の備品が「めくり台」。最初は四日市製で「鏡板」と同時に誕生した。これは支柱の左右に上演番組と次の番組を下げるアイディア品であった。ここに掲示するめくりは、四日市工場の山口豊さんが毛筆の達筆を振るった。これが番組と同じに曲名・役・氏名を書くものだった。変更があった時は、自分の出番の合間に書き直しで大変であった。それを見た安嶋は後年曲名だけをマグネットで下げる組立式の台を工夫した。ドライバー一本で組立てる現在のものは三代目で、西村淳さんが国立能楽堂の稽古舞台のめくり台の図面を入手されので同寸法にした。めくりも繰返し使うため、今では毎回二～三枚補充すればすむ。当初は協和酒類の広告の裏に書いたので、歴史資料にもなっている。

▼：さて、うとう会三冊目の記念誌「うとう」が出来た。二十・三十・四十周年すべての編集に携わったことに感慨を覚える。表紙のデザインは最初のものを貫いた。協和うとう会の歴史を綴る本誌として、また謡曲を趣味とするもののこだわりである。

▼：ことに今回は「みんなで作った」との実感が強い。企画制作に対する会員の幅広い参画・ご協力、本社謡曲部北河康之幹事のパソコン入力などの精力的な事務処理、大森大陸・薮下尚夫さんとのメール交信による原稿校正……などなど。

▼：第40回記念大会の準備が進んでいた昨年十月、中村寛之助さんから私に現金書留が届いた。「うとう会への参加は今の身体の具合では難しい。私の気持ちとして記念大会に少しばかり寄付をさせていただきたい」とのこと。また、記念大会直前に木下祝郎さんからご祝儀がうとう会事務局へ届けられた。謡曲をおやりにならない木下さんは、水原さんの六瓢能舞台の舞台披きにお越しになっていた。私には何か因縁を感じてならない。

▼：ちょうど十年単位の仕事なので、編集作業を通じて会社業務のコンピュータ化の変遷がよくわかる。二十周年はすべて手書き原稿で後は外注、三十周年はパソコンの分担作業を一つにまとめる編集、そして今回はすべてではないが、原稿や写真を電子メールで交信しながらの作業。それにしても、前の二つは会社勤めの余暇利用の作業、若かったとはいえ我ながらよくぞ…と思う。

▼：第41回まで約一ヵ月半。それまでにはご一読いただけることを念頭に作業を進めた。ミスプリ指摘を含めて、ご感想をいただければ…。（安嶋　将）

うとう
協和うとう会四十周年記念誌
平成十四年十月十八日発行
協和うとう会
東京都千代田区大手町
一-六-一　大手町ビル
協和発酵工業㈱内